2026年度　　PY

省略（注）の箇所は、著作権の都合上省略しています。

小　論　文

注　意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

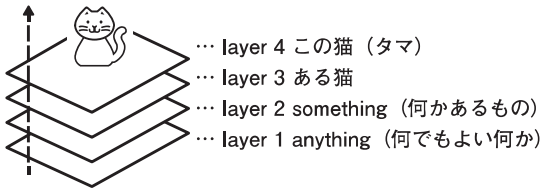
設問 I

any-ness という概念を説明した以下の文章を読んで，【問い】に答えなさい。

something，anything という英語の単語がある。両者の意味の違いに，注目してみよう。

something「何かあるもの」の場合には，「何であるか」は明示されていないだけで，「何であるか」の特定への志向性は働いていて，その「何」を明らかにすることは，どこまでも可能である。

他方，anything「任意のもの」の場合には，something とは違って，「何であるか・どれであるか」を特定しようとする志向性の働きは「宙吊り」にされていて，特定されないままの（不定状態の）「何であってもよい何か」「どれであってもよい何か」を表す。



図のように，「タマ」という固有名を持つ飼い猫である「この猫」は，ただ一つの個体に特定される。それに対して，「ある猫」は「猫」に分類される動物ならば，どの猫であってもよい。その「猫」という分類（区分け）さえも外して，犬であろうと，鉛筆であろうと，その他の「何」であろうとも，その一つ一つは something「何かあるもの」であることには変わりはない。逆に言えば，「何かあるもの」の内には，諸々の分類（区分け）が隠伏的 implicit に含まれている，とも言える。さらに，その隠伏的 implicit には含まれている「猫」「犬」「動物」「鉛筆」「文房具」などの諸々の分類（区分け）の働きを，隠伏的にも働かないように「停止」させて，分類（区別）自体を宙吊り状態にしてしまうところに，anything「任意のもの」「何でもよい何か」という layer 1 が出現する。

その layer 1 に位置づけられた anything の any の働きに注目して名詞を作ると，any-ness という名詞を作ることができる。any-ness は，anything の不定状態（何でもよい・どれでもよいこと，「何」の不定状態）に焦点を合わせた名詞表現である。

any-ness という概念は「任意性」と和訳することができるが，その訳では，その不定状態を十分に表現できているとは言い難い。なぜならば，「任意性」には，「意に任せる」という仕方で，「意」（意志・意図）が入っているために，「自分の自由な選択で決められる」ことまでも含意してしまうからである。しかし，元々の any-ness という概念は，主体による「選択」や「意図」とは独立に，layer 1 の世界の在り方それ自体を表す概念であり，選択以前の「何でもよい何かであること」「不定性」である。要するに，「任意性」という訳語では，主観的・主体的な意味合いが強く出すぎてしまい，layer 1 に位置する any-ness の，主観・主体以前的な自体性を表現できない。その点で，「任意性」という訳語は不十分なのである。

【問い】 any-ness という概念には，「否定性」と「可能性」が潜在的に働いている。その「否定性」と「可能性」の潜在的な働きについて，{A，B，C，D，…} という集合を――{猫，犬，鉛筆，雲，…} などの集合を一般化した例として――使用しながら，600 字以内で分かりやすく説明しなさい。

＜余　　白＞

設問Ⅱ

図１と図２は，厚生労働省「新しい時代の働き方に関する研究会」の報告書（令和５年度公表）に掲載された，２つの調査の結果である。

問１　図１と図２から読み取れる傾向について300字以内でまとめなさい。

問２　若者にとってのよりよい働き方は，どのようにしたら実現できると考えるか。問１の解答をふまえて300字以内で述べなさい。

図１　就労者の就業価値観の変化

省略（注）

【出典　厚生労働省「新しい時代の働き方に関する研究会」報告書：参考資料をもとに作成】

注１：縦軸は，凡例にある質問項目に対して，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそうは思わない」「そうは思わない」の４段階の選択肢のうち，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選択した人の割合の合計を示している。
注２：回答者は全国の満15～79歳の就労者（約6,000人）である。

図２　若者（中学生・高校生・大学生）の労働価値観

省略（注）

【出典　厚生労働省「新しい時代の働き方に関する研究会」報告書：参考資料をもとに作成】

注：調査は 2020 年に実施され，全国の中学生・高校生・大学生（計 1,000 人）が各質問項目に回答した。数値は回答の内訳である。